# 真鍋一史教授退職記念号によせて

社会学部長 髙 坂 健 次

真鍋一史教授は、慶応義塾大学法学部政治学科、同大学院法学研究科政治学専攻修士課程ならびに博士課程を修了され、1971年に関西学院大学社会学部に助手として就任されました。爾来、教育、研究、大学行政、社会貢献に従事され、38年という長い月日を本学で過ごされました。1972年には専任講師、1975年に助教授、1981年に教授に、また、1983年には大学院社会学研究科博士課程前期課程指導教授に、1987年には同後期課程指導教授になられました。社会調査論、世論・コミュニケーション・広告の研究がご専門です。

業績は「地球社会時代の諸問題についての実証的研究」を中心に夥しい数の業績（多くの英文の著作を含む）があり、研究領域は、国際広告、国際イメージ、日本人論・日本社会論・日本文化論の多岐に及んでいます。研究成果に対して３度に亘って日本広告学会賞（1981年に「広告をめぐる世論」に対して学術論文部門賞、1990年には『広告の社会学』（初版）に対して学術著作部門賞、1998年には『国際イメージと広告』に対して同じく学術著作部門賞）を受賞されておられます。近年は、価値観をめぐる国際比較調査研究に傾倒され、「世界価値観調査（WVS)」と「国際社会調査プログラム（IPPS)」、さらには「アジア・バロメーター調査（AB)」にも参画された日本では数少ない国際派研究者のお一人です。本学社会学研究科の「21世紀 COE プログラム」（2003－2007年度）についても、その研究機会を有効に生かして成果をあげられました。また、「社会調査士資格制度」の社会学部内および全国的制度の確立にもご尽力されましたことを付記しておきたいと思います。

学内においては、教務・学生委員をはじめ、院長補佐、企画調査委員、広報委員、大学評議会評議員、宗教活動委員会委員等を歴任され、学内行政にも多大の寄与をされました。また大学行政は学内に止まることなく、大学基準協会専門評価分科会委員、日本私立大学連盟「人文・社会科学分野の研究促進に関する協議会」幹事会委員、日本学術会議連携委員などを務められ、独自に形成された密にして広がりある社会ネットワークは本学部にとりましても本学にとりましても貴重な財産となりました。

真鍋先生の研究活動をめぐるもう一つの際立った特徴は、国際性です。国内の諸学会（日本社会学会、日本社会心理学会、日本行動計量学会、日本比較政治学会、日本分類学会など）に加えて、Facet Theory Association, World Association for Public Opinion Research, European Survey Research Association, Asian Consortium for Political Research などの国際舞台で活躍してこられました。ドイツ・ボン大学、フランス・社会科学高等研究院、アメリカ・ミシガン大学など数多くの大学の客員教授を務められたのをはじめ各種の学会大会の行われる海外各地を精力的に飛び回ってこられました。特に、イングルハート教授との共同研究とヤゴチンスキー教授との共同研究はそれぞれ真鍋先生の研究の重要な部分を形作ったように思われます。

社会的活動も多彩で、とくに兵庫県社会教育委員をはじめ種々の委員を務められました。

ご自宅が大学から近いという有利な条件を生かして、キャンパスと自宅を自転車で日に何度も往復され、学部ではいつも事務室前の印刷機で大量のコピーをされていた姿は多くの同僚の目に焼き付いています。さまざまな研究資料のコピーをその都度私もいただきましたが、真鍋先生から頂いた資料を集めたファイルボックスが瞬く間に一杯に溢れてしまったのには圧倒されました。小まめな資料収集と整理の几帳面さ、飽くなき（＝疲れを知らない）探究心、研究活動のためであれば労も煩も厭わぬ献身、研究会や学会大会・教授会での率先しての発言、学内行政に通暁した生き字引、会議での歯に衣着せない発言と労わりあるフォロー、等々も真鍋先生らしさの一端でしょうか。

2008年12月17日、社会学部では年内最後のチャペルがもたれ、真鍋先生がお話をされました。チャペル

の統一テーマは「希望をもって」で、当日はそのテーマの下での七回目でした。真鍋先生はアドベントを意識して「マタイによる福音書」第二章を引かれました。「東からきた３人の博士たち（新訳では、学者たち）」が東の方でみた星を頼りに「ユダヤ人の王としてお生まれになった」かた、すなわちイエスの許を訪ねる話です。“イスラエルの沙漠と言うと砂丘のようなイメージを持つ向きもあるかもしれないが、実は厳しい荒れ野である。しかもその荒れ野を３人の博士のように夜に旅するなんて、とても考えられない。そこには苦しく強靭な意志と努力が求められる”と真鍋先生は話され、そのエピソードの象徴的意味について語られました。そして必ずしも多くはなかったチャペルの参加者に向かって、「ご就任記念」（関学ではすべての新任教員に「ご就任記念」として聖書が贈られます）に貫われた聖書を片手に、「希望をもって生きなさい」と語りかけられました。これが真鍋先生の社会学部では現役教員として最後のチャペルでした。そして「私は（関学に就任以来）38年間希望をもって歩んでくることができた。（その旅は）失望に終わらなかった」と締めくくられました。

真鍋先生は若い時イスラエルにあるヘブライ大学コミュニケーション研究所ならびにイスラエル応用社会調査研究所客員研究員として研鑽を積まれ、尺度理論で著名なガットマン博士のもとでファセット・セオリーならびにデータ解析法を学ばれ、のちそれを応用発展され、法学博士の学位を慶応義塾大学から受けられました。真鍋先生が、夜の旅を経てイエスに巡り合うことのできた「東からきた博士」に自らを重ね、学者としての苦闘の旅への想いと真理に到達できた喜びとを重ね合わせておられたことは疑うべくもないでしょう。